

助成事業完了報告書

日本財団 会長 笹川 陽平 殿

報告日付:2025年4月11日

事業ID:2024000851

事業名:沖縄県浦添市における「子ども第三の居場所」(A)コミュニティモデルの運営(最終年度)

団体名:一般社団法人まちづくりうらそえ

代表者名:代表者 大城 喜江子

TEL 098-874-7610

事業完了日:2025年3月31日



■契約時

事業費総額	:	7,180,000 円
自己負担額	:	1,440,000 円
助成金額	:	5,740,000 円

箇所は「収支計算書」より自動転記

■事業完了時

事業費総額	:	7,183,300 円	収支計算書の黄のセルの値
自己負担額	:	1,443,300 円	収支計算書の緑のセルの値
助成金額	:	5,740,000 円	収支計算書の赤のセルの値。千円未満は切捨
助成金返還見込額	:	0 円	(収支計算書の青のセルの値)

1.事業内容

助成契約書記載の事業内容(予定)と、事業完了時の事業内容(実績)を対照可能とするため、助成契約書と一緒に綴じている「事業計画」の事業内容欄を転記した上、体裁を変えずに結果を記入してください。
なお、事業内容を複数設定している場合は、各事業内容ごとの完了時の実績を個別に記入してください。事業内容が4つ以上ある場合は、一つの事業内容ボックスに複数ご記載頂いて構いません。

■事業内容1

(1)助成契約書記載の事業内容(予定)

1. 沖縄県浦添市における「子ども第三の居場所」(A)コミュニティモデルの運営 (1)期間:2024年4月1日～2025年3月31日 (週5日、平日10時から17時まで開所、年4回ほど土曜にコミュニティランチ会を実施) (2)場所:沖縄県浦添市 (3)対象:15名(家庭や自身に課題を抱えた小学校低学年を中心)

(2)事業完了時の事業内容(実績)

1. 沖縄県浦添市における「子ども第三の居場所」(A)コミュニティモデルの運営 (1)期間:予定通り実施できた (2)場所:予定通り実施できた (3)対象:家庭や自身に課題を抱えた小学校低学年を中心に27名登録(必要のなくなったと考えられる高学年の児童には退所を促し主に低学年の児童に注力した)、おやつの許可登録児童はこちらに加えて24名登録(居場所OBOG含む)があった。
--

(4)内容:「子ども第三の居場所」をつくり、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援することで社会的相続を補完する。保護者支援、地域交流、チャレンジできる体験活動などを通して、子どもたちの自己肯定感の向上を図り、世帯の養育負担の軽減を試みる。また、コミュニティカフェを開き地域交流を図る中で、子育て世帯を孤立させない地域の目や行動様式を醸成させる。加えて、不登校児支援、親子支援、地域ボランティアの発掘・育成を行う。

(4)内容:「子ども第三の居場所」をつくり、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援することで社会的相続を補完する。保護者支援、地域交流、チャレンジできる体験活動などを通して、子どもたちの自己肯定感の向上を図り、世帯の養育負担の軽減を試みる。また、コミュニティカフェを開き地域交流を図る中で、子育て世帯を孤立させない地域の目や行動様式を醸成させる。加えて、不登校児支援、親子支援、地域ボランティアの発掘・育成を行う。以下に詳細を記す。

①毎日の活動サポート

放課後は、児童の受け入れと遊びや活動、宿題サポートをした。

②チャレンジタイムの実施

放課後や長期休み期間においては、子どもの経験不足を解消する体験活動実施(チャレンジタイム)。児童は職員が設定した活動以外にも「やりたい!」と自主的にイベントを企画(年間5本程度)し、自信をつけていった。また、昨年度たちあげた高学年のチーム「ZEROから始まる青春」でも何度か空き缶を集めて資金に変える活動を実施した。

→1年間で94本の実施実績。別紙に詳細示す。

③コミュニティランチ会の実施

5月の「子どもに学ぶ研修会&カレー会」、12月の「クリスマスお食事会」、「おそうじ・クリームシチュー会」、1月の「カレー会」、2月の「カレークッキング・交流会」など全5回、地域交流を深めることができた。

④学習遅滞児童受け入れ

2名、学習支援。(Rさん:年間通して、毎日1時間授業時間中)(Yさん:必要に応じて受け入れ)

⑤不登校児支援

短期的に図書館利用している児童が1名いた。現在登校できている。

⑥2月いっぱいまで火曜調理ボランティアによる弁当配布。希望を募り、現在毎食15名分配布していた。→34回/のべ513人

⑦長期休暇時の昼食支援

長期休暇には調理ボランティア、職員ができるだけ毎日昼食を提供した。→38回/1315人

⑧月・水・金おやつ提供

おやつ承諾書を保護者の方に書いてもらいアレルギーの有無を確認し、同意の上登録児童以外にも提供。準登録メンバーとして丁寧に関わり、気になる児童は登録を促している。→42回/のべ630人

⑨朝食支援

朝食提供が必要な児童2名に朝食を提供した。→165回

⑩ボランティアの発掘

遠足の引率ボランティアを居場所メンバーの父が行ってくれた。また、地域連携の行事、「食とあそびのもり〜タウンまつり」で居場所保護者の手伝いボランティアを募集し2名参加。ホットドッグなどを作り提供してくださった。現在小学生5名から「児童センターで働いてみたい」とボランティアの希望も出ており嬉しく思っている。また今年は食支援事業の流れで地域自治会から新規で9名の調理ボランティアの方が協力してくださった。今後もつながりを続け必要の際に連携しあえる地域づくりを発展させていきたい。

(3)成功したこととその要因

・開所三年目、毎月行っている地域ミニ要対協「五者会議」では、当たり前になる児童についての情報共有があり、それぞれが必要な役割を担いながら地域全体の子ども達・家庭の状況を見守りサポートしていくことが定着してきた。三年目で1・2年生で入所した子たちが部活に入ったり、家庭状況が安定したりといったこともあったので、4年生以上の部活に入っている入所児童を中心に退所を促し、登録の人数を34人から20人まで減らし、サポートが必要な児童といつでもつながることができるよう配慮した。また、退所した児童も児童センターに遊びにきたり保護者が来館したりといったこともあったのでとくに隔てることもなく見守っていった。

・今年度は大きく助成金がカットされることもあり、食提供などのこれまで続けていた事業が存続できない危機的状況にあった。休眠預金の助成金に手を挙げ、食支援に関する大きな予算をいただけることになったおかげでこれまで第三の居場所で実施していた「弁当提供、長期休暇の昼食提供・おやつ提供」に加え、「新たな居場所として地域自治会と連携した新しい居場所での食提供・パントリー事業・地域一丸となって実施する食とあそびのおまつりの事業」といったより幅広い体験活動を有したサポートができた。その結果、なかなか当居場所になじまなかったシングル世帯の児童がその新しい居場所に定着したり、児童センターにはなかなか顔のみられない子ども達もケアしていくことができるようになった。長期休暇の合同調理で地域自治会の皆さんが台所に立つことで子ども達との交流も生まれていたことも良かった。また、食材のパントリーでは、五者会議のネットワークを存分に発揮し30もの気になる世帯に食を提供、アンケートを交えて悩みをお聞きすることで10世帯を発達相談や別の居場所などの支援先に繋ぐことができたことも大きな成果であった。居場所に通う子ども達も安心して夏休みの時や休校の時の昼食を得たり、仲間関係ができてきたことでいつもはなかなか仲間関係が築けなかった子も「みんなで食べるとおいしい」と発言したり、コミュニティに馴染んでいくという部分で成果が見られた。一方おやつ提供では慣れてくると「え～これだけ?」「べつにいらないし」などといった言葉もあり支援のやりすぎも良くないといった点も見られたので定期から不定期に変え、おやつ提供が子ども達の豊かな成長の妨げにならないよう配慮した。

・今年度も登録児童にたくさんのふれあいや体験活動を実施してきたのだが、別事業所との連携の遠足で、担当の方に「参加した子どもたちはみんな体験慣れしていた」といった評があった。入所前は体験に飛び出すさいに躊躇したり、参加しても楽しみ方や見る視点が不明確で緊張していた子どもたちが、たくさんの経験のシャワーを浴びることで自信をもっていろんな事を吸収しているということが第三者からの指摘によりわかり大変嬉しく思った。1年目は列に並んで行動することもままならず、一人ひとりが散り散りになっていたこともあったが、3年目には新しいメンバーの行動を指摘したり、みんなで楽しむということを意識した行動も少しづつみられるようになったのは成長だと感じた。

・保護者との付き合いも3年になった。「入所の条件」として、子どもたちが「入りたいからお母さん面談して!」と連れてこられた皆さんだったが、3年たつと本当に色々な話をしてくださるようになった。入口が「相談」「困り感」からの面談ではなかったためフランクな関係が築けていたことが良かったのだと思う。当初は一般家庭と思っていたが児童に発達の遅れがみられ後に虐待が発覚した家庭との面談では、事前に学校やSSW、子ども家庭センターの担当者ともケア会議をしたりしながら役割を確認し、保護者に発達専門の病院を進めた。その中で今まではどんな助言にも耳を傾けなかった保護者が「状況を知った今、●●に向き合いたい」と話してくれた。また、多子世帯で忙しくされていた保護者の方が下のお子さんの障害に関する通院の中でいろいろな人と出会ったりこちらでのサポートもあったりといった環境の中で「●●ともっとしっかり話をしたい」と話したり、居場所も活用しながら不登校を乗り越えた保護者が「子の不登校を改善しようと夫婦で子どもの話をすることが多くなったことで関係が良くなり子ども達もいい方向に成長した」と話してくださったり、3年で面談の内容や保護者が子ども達を見る視点がとても向上したと感じた。入所当初は暗い表情だった保護者にも笑顔や余裕が見られ、居場所や地域での見守りの中、安心して子育てができているからなのではと感じ、その変化に何度も感動させていただいた。

・「地域の子どもを地域で育てる」ことを念頭に置き、近隣子ども施設や行政、地域企業なども一緒に事業を行っていった。回を重ねるごとに地域の皆さんから「あれはどうなった?」「こうしたらどうだろう」と自発的な声が多く上がるようになってきている。当団体も地域の一員として、子どもたちや保護者が健やかに過ごせるおうちのような温かい環境づくりを今後とも行っていきたい。

(4)失敗したこととその要因

とくにありません。

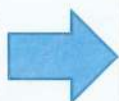
(5)事業内容詳細

別紙に添付いたしますのでご参照ください

■事業内容2

(1)契約時の事業内容

(2)事業内容の実施(完了)状況



(3)成功したこととその要因

(4)失敗したこととその要因

(5)事業内容詳細

■事業内容3

(1)契約時の事業内容

(2)事業内容の実施(完了)状況



(3)成功したこととその要因

(4)失敗したこととその要因

(5)事業内容詳細

■事業内容4

(1)契約時の事業内容

(2)事業内容の実施(完了)状況



(3)成功したこととその要因

(4)失敗したこととその要因

(5)事業内容詳細

2.契約時事業目標の達成状況:

(1)助成契約書記載の目標

生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」を開設・運営する。行政、NPO、市民、企業の方々と協力し、誰一人取り残さない地域子育てコミュニティをつくることで、「みんなが、みんなの子どもを育てる社会」を目指す。
・2025年3月31日までに一日平均利用児童数を15名にする。
・ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築、多世代交流機会の提供
子どもの「経験不足」を解消するような定期的なイベントを事業期間内に24回実施する。

(2)目標の達成状況[700文字以内]

入力文字数	700	文字数チェック	700文字を越えています。700文字以内になるようご調整ください。
・2025年3月31日までに一日平均利用児童数を15名にする。→達成。現在平均27名 ・ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築、多世代交流機会の提供→調理ボランティアで地域の方9名にあらたにご協力いただき子ども達の交流機会を得た。行政・学校も入った近隣子ども関連施設とのミニ要対協議「五者会議」で地域のサポートの必要な児童の情報共有を毎月行い必要な支援へとつなげることができた。浦添市の子ども第三の居場所の報告・情報共有会も年度開始時に始めることができた。また、自治公民館への訪問や小規模多機能ホームでの交流事業など多世代交流の事業も13回実施することができた。また、「食とあそびのもり～タウンまつり」では地域の自治会や近隣子ども施設、企業にもご協力いただき、子ども達の食支援や栄養についての学びに加えて「住んでいてほっとする」顔の見える交流を持つことができ良かった。 ・子どもの「経験不足」を解消するような定期的なイベントを事業期間内に24回実施する。→イベントを94回、生活支援「バーバーもりのこ」を28回、親子タイム・ママカフェの実施を28回、マナーの練習や食体験を通じた仲間の交流である食支援を279回実施し、総合計401回もの多くの体験活動を実施することができた。支援金事業では、沖縄の自然を専攻した学生との遠足「うりずんスクール」や、遠方の動物園へ生き自然体験・動物とのふれあいなど充実した体験を得ることができた。			

3.事業実施によって得られた成果

【保護者との面談と五者会議で実現できた深みのある支援と関わり】 今年度は本事業の最終年度である。「児童センターの中で子どもの居場所を作り、手立ての必要な児童に無料学童のような関わりを行う」という趣旨でスタートした事業であったが、これまで児童センターの来館者が「不特定多数」であったのに対し、毎日来るメンバーがいるという点や保護者も来館し面談をすることで家庭丸ごとサポートしていく、という点はとても画期的であった。登録した児童は退所した子も含めるとおよそ40名であったが、子どもだけでなく保護者や家庭が見えることで深みのある支援や関わりができたように思う。加えて地域のミニ要対協である「五者会議」では放課後学童に入っていない気になる子についての紹介があったり、学校の時間に授業に入れない子が落ち着いて学習サポートしてもらえる場としても認知いただき、対応することができた。 【体験活動を重ねればたいにいった子ども達】 子どもたちに数々の大小、内容いろいろな体験活動に参加してもらうことで、子ども達が「やってみること」へのハードルが下がりいろいろなチャレンジができたり、仲間同士のけんかや意見を通し折れていく体験の中でコミュニケーション能力が向上する子ども達も多かった。結果、自信をつけ部活動に入ったり、別の友達と遊んだり新たな居場所をみつけて巣立っていく様子も多く見られ、職員としては寂しいきもちもあるがそれよりも喜ばしく思った。そして何かあった時やこちらを思い出した時には「元気？」と遊びに来てくれる。「いつもそこにある地域の、おうちみたいな場所」として子ども達の頭の片隅に居場所があるのならとても嬉しいなと思う。それは保護者も一緒に地域の気になる子がいたら退所した子の保護者が「あの子気になるからこちらで見てくれないか」と話があったり、「下の子が生まれたよ」と見せにきてくれたり、地域のちょっと立ち寄られてほっとできる場であることが大切なのだらうと感じた。 【地域自治会との連携で「地域の子は地域で育てる」の実現に近づいた】 今年は地域自治会と一緒に調理し長期休暇の食事提供を行ったり、おまつりをしたりといった活動も実施することができた。そこで顔見知りになった子ども達のことを地域の大人が「見守り」、保護者や子ども達を思いやっていくことで「孤育て」も減っていくのではないかと考える。一つの団体ができることはそんなに大きくはないかもしれないが、心ある地域の皆さんやサポートしてくださる皆さんとともに、「地域の子を地域で育てる」という理想に近づけるようにしていきたい。次年度からは子ども家庭庁の「地域こどもの生活支援強化事業」の補助を受けられることになった。これまでサポートしていた世帯に加え、これから必要とされる方にもリーチしていきながら、「この場所で生まれてよかった、住んで良かった」と思えるような地域コミュニティ作りの一助になれば幸いに思う。
--

4.活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案

・たくさんの体験活動やおやつ、おもちゃのプレゼントなど助成金やご支援でなりたつ数々のものや事柄について慣れてしまっていて、「おやつこれだけ?」「いらないし!」といった、「感謝を欠いて」しまう子ども達が出てきたため、提供の仕方やタイミングについてとても悩んだ。その発言をしたことが「悪い」のではなく、感謝を押し付けるわけではない、いただいたことに感謝できるような子どもであってほしいと感じた。その子については職員が気づいたときに対話を通して感謝について伝わるように心がけ関わった。

・おうちのような場所、ということが影響してか社会性や正しい生活習慣についてなかなか改善できなかったように思う。食事中的ふざけあいや兄弟のようなとっくみあいのけんかなどが頻繁にあった。それがひとつの「生活体験」であったのかも知れないが徐々に争いを話しあいで解決できるよう、職員も関わっていきたい。

・児童センター内の居場所ということで、特定の児童が毎日通っていたりいろんな行事に参加していたためか、居場所登録メンバー以外の児童が入りにくい雰囲気を作ってしまったのではないかとと思われることが何度かあった。次年度は登録児童数を増やしいろいろな子どもたちに体験活動や児童センター内での居場所のサポートを教授できるよう、登録メンバーの制限をなくしたり、児童センター職員との連携も深めながら、来館するすべての子ども達が居心地のよい居場所をつくっていききたい。

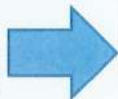
5.事業成果物

(1)助成契約書記載の成果物名称

活動報告書

(2)事業完了時の成果物名称

活動報告書



(3)未作成となった要因

とくにありません

(4)成果物を登録したウェブサイトのURL

<https://fields.canpan.info/report/detail/32521>